



Title	外国地名の漢字表記をめぐって : 「オーストラリア」を中心に
Author(s)	王, 敏東
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1992, 26, p. 17-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47819
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外国地名の漢字表記をめぐって

——「オーストラリア」を中心に——

王 敏 東

一 はじめに

今世紀に入って、世界各地で地名の研究が盛んになり、やがて日本へ伝わってきた。しかし、外国地名の研究は国語学において、二十世紀の後半になっている現在でも、まだ十分進展していない状態である。

地名には元の言葉の意味が明確であるものも多い。そこで、その地名を訳す場合には、その土地に対するイメージを含意させることもある。現在、外国地名を片仮名で表記することは普通であるが、江戸時代から大正期にかけては、むしろ漢字表記の方が圧倒的に多かった。片仮名で外国地名を表記すると、その地名の元来持っている意味を表せないし、その地に対するイメージも表現できない。しかし、表意文字の漢字で表記すれば、ある程度、元の意味を表すことが可能になる。

日本における外国地名は元の中国の表記をそのまま採用したものが多⁽¹⁾い。中国の場合はマテオ・リッチの作った

『坤輿萬國全図』（一六〇二年）に出ている表記を踏襲したものが多⁽²⁾い。しかし、リッチの時代、世界地理の知識はまだ十分ではなかったので、リッチ図以後に発見された地がどう表記されるのかは興味深い問題になってくる。今回はリッチ図以後に発見された「オーストラリア」を取り上げて、通時的に論じてみたい。

「オーストラリア」の漢字表記を通時的に検討するため、日本または中国の古来伝わってきた歴史書、地理書、地図、紀行文、文学作品、教科書、節用集、百科辞典、辞書、新聞など、なるべく多くのジャンルの文献から用例を集め、それらを年代順に配列し（二十九頁）、分析を行うことにした。なお、表記の変化の過程を分かりやすくするため、用例を図（三十四頁）にする。調査に用いた資料は三十八頁の付録にあげておく。

二

二世紀に、アレキサンドリアの地理学者プトレマイオスがインド洋の南の果てに「未知の世界」（ラテン語では Terra Australis Incognita といふ）⁽³⁾という大陸を想像した。しかし、実際には、「オーストラリア大陸が世界史上に姿をみせたのは、一六〇三年オランダの探検隊がこの大陸の東北端、ヨーク岬から西南進し、西岸をまわって南オーストラリア州のセドゥナまで南下して地図を作成、この地域をニューホーランドと呼んだのが最も古⁽⁴⁾」⁽⁴⁾である。⁽⁴⁾『The New Encyclopaedia Britannica』(ed. by P. W. Goetz, 15th Edn. 1989) では「The exploration and settlement of Australia began early in the 17th century. ……A second expedition of 1644 contributed to knowledge of Australia's northern coast; thenceforth, New Holland was the name for the landmass.」と述べられている。このブリタニカ百科大事典とほぼ同じ内容のことが『地

図の歴史——世界篇』(一九七四年・織田武雄)にも述べられている。なお、『外国地名語源詞典』(一九八四年・上海)にもこの地域が「新荷蘭」(New Holland)と呼ばれたのは十七世紀の中頃だと記されている。一七七〇年になって、クックは東岸地方を New South Wales 「新サウス・ウェールズ」と命名した。一八〇一年、イギリス人フリンダースは、この大陸を周航して、「新オランダ」と「新サウス・ウェールズ」は同一の大陸であることを確認し、この大陸を古くからの呼称によりテラ・アウストラリスと呼ぶことを提案した。一八二八年、オーストラリア全土はイギリスの支配下となり、地名も英語化された。⁽⁵⁾

以上のように、文献によってオーストラリアの発見された年代については多少のずれがあるようだが、マテオリッチの『坤輿萬國全図』が出た後にオーストラリアが正式に世界の舞台に登場したことは明らかである。

前述のように、リッチの『坤輿萬國全図』ではオーストラリアの姿はまだ見ることができない。また、一六二三年に作成された『職方外記』にも、一六七二年に完成された『坤輿図説』にもオーストラリアのことは記述されていない。それはおそらく両書ともリッチ図の系統に属しているからであろう。一方、リッチ図は当時中国の上層社会でただの飾り物として扱われており、学術的な価値はあまり認められなかったかと思われる。また、リッチの没後(一六一〇年没)二百年ほどは、中国人は「天朝」の思想を抱持して、外国のことをあまり重視しなかったもので、この期間中国では新しい世界図や世界地理書はほとんど作られなかった。しかし、一八四二年の「アヘン戦争」の敗戦以後、中国人ははじめて世界のことを重視しなければならぬと自覚し、ついに一八四八年に『瀛環志略』が出るに至った。⁽⁶⁾

『瀛環志略』はオーストラリアのことを「澳大利亞。一名新荷蘭。在亞細亞東南洋巴布亞島之南」と記している。

つまり、「ニューホーランド」に当たる表記と「オーストラリア」に当たる表記を並記しているわけである。一方、日本でもこの両系統の表記が諸文献に頻出してゐる。なお、「オーストラリア」の漢字表記として更に「豪」(濠)系と「澳」(奧・澳)系に分けることができる。以下はオーストラリアを指す漢字表記について述べる。

三

1 「ニューホーランド」について

「ニューホーランド」に当たる表記には中国では「新荷蘭」(一八四八年『瀛環志略』)や「新阿蘭地亞」(一八六〇年版『坤輿全図』)などがあげられる。「新」の部分は「New」の意訳で、下半は「オランダ」又は「ホーランド」の音訳である。こういう訳し方は「ニュージーンランド」や「ニューヨーク」の場合にも見られたが、現在の「南アフリカ」の場合も同じ語構成である。

一方、管見のかぎりでは、オーストラリアが日本においてはじめて正確な形に近い形で描かれたのは一七七五年に作られた『フィッセル改訂ブラウ世界図古写』である。オーストラリアは中国においてよりも日本の方が一般には早く知られたかと思われるのである。それまでオーストラリアは南極大陸と連続しているものと想像されており「墨瓦蜃泥加」と呼ばれることがあった。この呼称は一八六八年の『童蒙階梯西洋往来』にもまだ残存している。『フィッセル改訂ブラウ世界図古写』の中のオーストラリアの部分は「新忽爾蘭埏亜」と名付けられている。

そして、同表記は一八五二年の『新訂坤輿略全図』にも用いられている。この「新忽爾蘭埏亜」は明らかに「ニューホーランド」の訳である。語の前の部分の「新」は「ニュー」(New)の意訳で、後の部分の「忽爾蘭埏亜」は

「ホーランド」の音訳であろう。

ホーランドは即ちオランダのことである。「新忽尔蘭埗亜」の後、「新和蘭地」（一七九四年・桂川甫周『北槎聞略』付録地球図等）、「新阿蘭陀」（一八一〇年・高橋景保『新訂万国全図』等）、「新和蘭陀」（一八四六年・永井則『銅版万国輿地方図』）、「新和蘭」（一八〇二年・山村才助『訂正采覧異言』）などの表記は現れていた。どれも「ニュー」の部分を「新」と意識して、後の部分を「オランダ」の漢字表記をつけているのである。

この「ニューホーランド」に当たる表記は十九世紀の中頃まで日本でオーストラリアを指す語としてよく使われていたが、後になって、「オーストラリア」に当たる表記が優勢になった。

2

中国では『瀛環志略』（一八四八年）に「オーストラリア」を「澳大利亞」と音訳した例が見られる。この「澳」で始まる表記が中国では終始優勢に使用されている。「澳」の字体に類似した「奥」で始まる表記もあったが、長くは使われなかった。日本では中国の「澳」で始まる表記を受け入れたばかりでなく、「奥」で始まる表記まで生み出したかと思われる。しかし、日本において「澳」（奥・奥）系表記は過渡期的な存在にすぎなかったようである。

一方、日本では「澳」（奥・奥）系の外に、「豪」（濠）系の表記がある。⁽⁹⁾

管見の範囲では「オーストラリア」の語音に当てた表記は、山村才助の『訂正采覧異言』（一八〇二年）にすでに見られる。⁽¹⁰⁾ だが、同書に掲載されている「地球略全図」や「亞細亞洲輿地図」ではオーストラリアに「新和蘭」という表記を用いている。これは当時、日本において、「オーストラリア」についての呼び方にゆれのあったことを

示していると言えるだろう。このゆれは二十世紀の前半まで見られるようである。現在は「豪」で始まる表記が優勢である。

(1) 「オー」の部分について

① 「澳」(奥・澳)系表記

「澳」で始まる漢字表記の先駆と思われる「澳大利亞」は中国の『瀛環志略』(一八四八年)に見られる。この表記は後にも中国で通用し、今日まで正当な表記とされている。⁽¹⁾

「オー」の部分に対して、中国には「奥」を当てた例があった(一八六四年の『萬國公法』に「澳大利亞」、一九〇〇年の『萬國通史前編』に「奧地利亞」が出ている)。しかし、オーストラリアは海洋に囲まれている。中国人は海外の地名によく三水「シ」をつける傾向があるので、「奥」で始まる表記の使用された年代はごく短く、「水」の印象を呼び起こす「澳」で始まる表記に戻った。要するに、音を表す「奥」と意を表す三水「シ」の形声文字である「澳」を「オーストラリア」の表記として採用したわけである。

日本では、中国で作られた「澳」で始まる表記(「澳大利亞」など)が十九世紀の後半によく使われていたが、同時代に、中国で見あたらぬ「澳」で始まる表記も登場した。例として「澳大利」(一八七三年・山本與助『世界婦女往来』)、「澳大利亞」(一八六九年・福沢諭吉『世界国尽』)、「澳大利亞」(『世界国尽』)などがあげられる。しかし、日本においては、この「澳」(奥・澳)系表記はむしろ「ニューホーランド」に当たる表記から「豪」(濠)系表記へ移る過渡的な存在にすぎなかった。

② 「豪」(濠)系表記

管見の限り「豪」(濠)系表記は日本に多く現れている。例として「豪斯多刺里」(一八四七年・箕作省吾『新製輿地全図』)、「豪斯多辣里」(一八六四年に四刻した『大日本新撰永代節用無尽蔵』の「輿地全図」)、「濠斯刺利」(一八八八年『増訂もしや草紙』)、「濠太刺利」(一九一九年の『大阪毎日新聞社改造世界地図』)などがあげられる。

武部良明氏は『日本語の表記』(昭和五十四年・角川書店)に「オーストラリアを表す「濠」は当用漢字表に掲げられていないため、同音の漢字「豪」に書き換えることが一般化した」と述べている。しかし、「オーストラリア」の漢字表記の流れを見ると、「豪」で始まる表記は「濠」で始まる表記より出現年代が早かった。むしろ、「濠」は新しく現れた形と考えられる。

たとえば、一八四七年の『新製輿地全図』に出ている「豪斯多辣里洲」や、一八五〇年の『万国地球全図』に出ている「豪斯多刺里亞」、更に、一八五七年の『万国一覽』に出ている「豪刺合拉里洲」など、いずれも「濠斯太里」(一八六〇年『航米日録』)や「濠斯多利」(一八八七年『環游日記』の「地球図」)などの「濠」で始まる諸表記より出現年代が早かった。

「豪」「濠」は同音である。「濠」で始まる表記の出現は「豪」で始まる表記より遅い。どうして「豪」で始まる表記がすでにあったのに、わざと筆画数の多い「濠」で始まる表記を生み出したのか。私見では、「濠」で始まる表記の出現は「澳」で始まる表記の生成と発想が同じではないかと思う。つまり、「水に囲まれた大陸」などで、音以外に、漢字の表意性を十分生かし、三水「シ」を「豪」につけたのではないか。その後、昭和二十二年に当用漢字表が公布され、「濠」が入っていないため、「豪」が復活したという経緯が予想される。

(2) 「ス」の部分について

「ス」の部分については「斯」「士」で当てた場合（「豪斯多刺里」、「豪斯多辣利」、「奥士大利亞」など）もあるが、略された場合もある。

全体的に言えば、「澳」系表記は「ス」の部分省く傾向がある。言い換えれば、中国で作られた漢字表記は「ス」の部分省略して、「澳」（「オー」）から直接「大」（「トラ」）に連なる傾向がある。逆に、「豪」（「濠」）系表記は「ス」を略すことは少ない。

子音の「s」は西洋語でも中国語でも一つの音節にならない。一方、日本語の場合は「s」一音だけでは落ち着かないので、「s」の後に母音の「e」を付けて、一つの独立した「ス」の音節になった。そのために、日本では「ス」の部分省略さないものと思われる。

「ス」を省略する現象から見て、「澳」系表記が中国で作られたことが一層明らかになるであろう。逆に、原語の「s」の部分を「ス」と一音節として独立させ、しかも「斯」を当てたりする現象がよく「豪」（「濠」）系表記に見られるので、この系統の表記は西洋音が直接日本に入ったためのものと考えられ、日本で作られた可能性が大きい。二十世紀前半、日本に現れた「濠太刺利」、「濠太利」、「濠太刺利亞」は「ス」に当たる部分が見当たらないが、これは中国の「澳」系表記を受け入れたためと思われる。

(3) 「トラ」の部分について

中国では「大」一字で「トラ」の音に当てた。たとえば「澳大利亞」「澳士大利亞」「奥大利」などである。この使い方はそのまま日本に入ったが、日本人にとって「大」より親しみを感じる「太」を生じ（「奥太利亞」、「豪太

刺利」など）、こちらの方が多く使われている。

日本で当てたと思われる「豪」系表記は「ト」の部分を「多」で、「ラ」の部分を「刺」あるいは「辣」で当てた（「豪斯多刺里」、「豪斯多辣里」など）。つまり、音節ごとに漢字一字を使って当てたわけである。

(4) 「リ」の部分について

中国に於ても日本に於ても「利」は「里」より優勢を占めている。この現象は「アフリカ」の「リ」の場合と同様に、慣用的に受け継がれたものである。⁽¹²⁾

(5) 「ア」の部分について

中国でも、日本でも、語尾の「ア」が脱落する現象は外国地名の漢字表記においてよく起こる。「インディア」の「ア」の場合と同じく、「オーストラリア」の場合にも、「澳大利」「豪斯多刺里」「濠太刺利」のように「ア」を略して、直接「リ」で終わる表記が多い。

3

オーストラリアの発見はマテオ・リッチの『坤輿萬國全図』の刊行後のことであった。「インド」や「ペルシヤ」⁽¹³⁾などの地名と違い、新しく知られた地名であるために、中国からの影響は比較的受けていない。したがって、「オーストラリア」の漢字表記は中国の表記を受け入れつつも、日本独自の形を發展させたのである。

「ニューホーランド」に当たる表記は日中両国にも早くからあったが、十九世紀の初め頃から「オーストラリア」の当て字表記が増えてきた。それは同時期のフリンダーズによる提議に関係があると思われる。

「オーストラリア」に当たる表記に関して、中国では「澳大利亞」という表記が一貫して一方的な優位を示して

いる。そして、この「澳大利亞」という表記は日本にも伝わってきたものと思われる。しかし、「澳」という文字の発音や、「ス」の音の省略、「トラ」の一音節化などが日本人の感覚にあわないため、最終的には日本では長く使われていないままで終わった。その代わりに、日本独自の「豪」(濠)系表記が日本で普及するようになっていく。「濠(洲)」という用例は今の所、中国ではごく少数の和訳文章か、日本で出版された中国の雑誌でしか見つかっていないので、この系統の表記はおそらく日本人が直接西洋音と接し作った表記で、その後、中国に伝わったと考えられる。

四 おわりに

一般的に言えば、日本において外国地名の漢字表記は中国からの影響を受けることが多い。しかし、「オーストラリア」の場合はマテオ・リッチの『坤輿萬國全図』に記載されていないので、基本的には日中両国が各自に違った漢字表記を発展させている。とは言っても、日本において「豪洲」という中国風の造語がなされたことや、一時中国で作られた「澳」系表記が日本に入ったことなどに目を向けるならば、やはり中国からの影響を受けているのである。ところで、用例数が少ないが、日本独自で発展させたと思われる「濠(洲)」という表記が二十世紀の中国文献で見られるのは、外国地名の漢字表記において日本が完全に中国から一方通行で影響を受けただけではないことを示している。

外国地名の漢字表記は造語上、活発な機能を持っているし、長い歴史を持っているので、「外国地名をなるべく片仮名で表記する」という内閣告示の「当用漢字表」(昭和二十一年)でも「米国」「英国」等の用例は、従来の

慣習に従ってもさしつかえない」とある。こういう表記法は現代でも一定の地位を保っている。「日豪」などの表記は現在も見られるのである。

外国地名の漢字表記にまだ違った変化経路を見せるものがあり、研究に価する。より多くの地名を調べ、又は別の視点から探究すれば、新しい現象が見てとれると思われる。それら明らかにすることを今後の課題にしたい。

注

- (1) 王敏東「外国地名の漢字表記について——「アフリカ」を中心に——」(大阪大学国語国文学会『語文』五十八・平成四年)、『続・地名語源辞典』(二二一頁)など。
- (2) 前掲論文。なお、方豪『中西交通史』(一九五三年)、王庸『中國地理学史』(一九八六年)など。
- (3) プトレマイオス自身の手になる図は現存していない。詳細は『プトレマイオス地理学』(織田武雄監修・中務哲郎訳・一九八六年・東海大学出版会)などを参照。
- (4) 『世界地理百科大事典』(一九七三年・講談社)
- (5) 牧英夫『世界地名ルーツ辞典』(一九八九年・創拓社)
- (6) 方豪『中西交通史』、王庸『中國地理学史』
- (7) 「ニュージールランド」は「新則蘭地」(『北極聞略』・一七九四年)や「新西蘭」(『地理全志』・一八五四年、『翻刻萬國通史』・一八七八年)などと訳されたことがある。一方、「ニューヨーク」は「新約克」(『航米日録』・一八六〇年、『米欧回覧実記』・一八七六年)と訳されたことがある。
- (8) 鮎沢信太郎氏による(「マテオ・リッチの世界図に関する史的研究」と、「墨瓦蜃泥加」(メガラニカ)はマゼラン Magellan, Magalhaes に因んで名づけた大洲である。東洋では、リッチによってはじめて紹介された。その後、中国では清の後半期、日本では幕末に至るまで一部の世界図作家の間にその存在が論議された。
- (9) 「濠洲」(『湖北学生界』第五期)、「南濠」(『漢声』一九〇三年、六月号)の用例は、日本で出版された中国の資料

「オーストラリア」の用例一覧表

表記〈振り仮名〉	年代	書名
〈～おらんだ〉		
亜烏斯答刺利 〈あうすたらりー〉	1839	YA
新ヲランタ	1840	120
新和蘭陀	1846	15
新和蘭陀多	1847	66
豪斯多刺里	1847	66
豪斯多辣里洲 〈アウスタラリ〉	1847	66
新阿蘭陀	1847	85
嘉本達利地	1847	二十六
(西志作) 新阿即 第亞	1847	二十六
新悉蘭地亞 (西連嘉本達利亞)	1847	二十六
澳大利亞	1848	十
新和蘭陀	1850	84
豪斯多刺里亞	1850	84
新阿蘭陀	1850	87
豪斯多辣利洲 〈アウスタラリー〉	1851	70
新和蘭	1851	70
新和蘭陀	1852	69
アウスタラリ	1852	69
アウスタラリイ	1852	69
新忽爾蘭埜亞	1852	71
新阿蘭陀	1852	72
豪斯多辣利洲	1852	72
新和蘭国	1852	72
新和蘭	1854	へ
奥	1854	五十三
澳	1854	五十三
澳大利 (又名曰新荷蘭)	1854	五十三
澳大利亞	1854	五十三
島嶼洲	1855	75
(南) 亞士低里亞	1855	75
豪斯答拉刺	1855	79
新和蘭	1855	bo
新忽爾蘭埜亞	1775	52
新則蘭地	1792	56
ノウハホルランド	1792	11
新和蘭地 〈ノワ?ヤホラン ヂ?ヤ〉	1794	57
新忽爾蘭埜亞	1797	53
新和蘭地 〈ホッランヂヤノ ヲハ〉	1802	ヒ
新和蘭地 〈ワッランヂヤノ ヲハ〉	1802	ヒ
新和蘭	1802	ヒ
新和蘭陀	1810	14
哇希島	1820以後	六十七
新阿蘭陀	1829	105
新ヲランダ	1836	82
新阿蘭陀 〈ヲランダ?〉	1836	82
新阿蘭陀	1836	117
新和蘭	1836	RI
アウスタラリ	1838	pu
新ホルラント	1838	pu
新荷蘭 〈おらんだ〉	1838	pu
亜烏斯大刺利 〈あうすたらりー ?〉	1838	pu
烏烏斯答刺利 〈アウスタラリー〉 (*「烏鳥」は「亜 鳥」の誤記)	1839	MA
亜烏斯答刺利 〈アウスタラリー〉	1839	MA
新和蘭陀 〈～おらんだ〉	1839	MA
新和蘭 〈～おらんだ〉	1839	MA
「アウスタラリ」	1839	YA
新和蘭	1839	YA

墨加臘泥加 〈めがらにか〉 (ともいふ)	1868	ウ	新阿蘭陀	1855	bo
オオスタリヤ洲	1868	pyu	アウスタラリ	1855	bo
ヲオスタリア國	1868・1	T	新阿蘭陀 〈ニウボルランド〉	1856	96
ヲオスタリヤ	1868・1	T	澳大利亞	1856	五十四
澳太利亜 〈をうすたりや〉	1869	タ	新荷蘭	1856	五十四
澳太利亞 〈あふすたりや〉	1869	タ	新ホウラント	1857	サ
澳大利亜 〈あふすたりや〉	1869	タ	豪斯合拉里洲	1857	サ
新和蘭 〈しんおらんだ〉	1869	タ	豪斯多刺里	1858	76
新和蘭 〈しんをらんだ〉	1869	タ	新阿蘭地亞	1860	七
あふすたるあじや	1869	タ	豪斯多辣里(洲)	1860	pa
澳太利亜	1870	チ	濠斯太里	1860	pa
澳太利亜洲	1870	チ	アウスタラリイ	1860	pa
澳太利亜 〈オオスタラリヤ〉	1870	チ	豪斯多刺里 〈アフスタラリイ〉	1860	chi
澳太利亜 〈ヲオスタラリヤ〉	1870	チ	豪斯多辣里 〈アフスタラリア〉	1860	chi
澳太利亜 〈アウスツレリヤ〉	1870	チ	新和蘭陀	1860	chi
澳太利亜 〈アウスタラリヤ〉	1870	チ	澳大利亞 〈アウタラリア〉	1861	KU
澳大利 〈ヲオスタリヤ〉	1870	チ五	澳大利 〈アウスタラリー〉	1861	KU
澳地利亞	1871	tya	新荷蘭 〈ニューウ子ーデルラ ント〉	1861	KU
澳太利亜 〈オウスタラリー〉	1871	tya	澳大利亞(即新荷 蘭)	1861	KU
澳地利亞 〈おうすたりや〉	1872	ク	〈アウスタラリヤ〉		
澳太利洲 〈おうすたりし う〉	1872	コ	澳大利亞	1863	六
澳太利亜 〈ををすたりあ〉	1872	コ	新和蘭陀	1863	124
澳太利亜洲 〈あうすたりあ しう〉	1872	コ	〈アウストラリー〉		
澳大利 〈あうすたる〉	1872	コ	新和蘭地	1864	119
			豪斯多刺	1864	119
			豪斯多辣里州	1864	119
			奧大利亞	1864	二十七
			豪斯多刺里	1868	95
			豪斯多刺里亞洲	1868	95
			澳太利洲	1868	ウ
			〈おうすたりやし う〉		
			新和蘭陀	1868	ウ
			〈しんおらんだ〉		

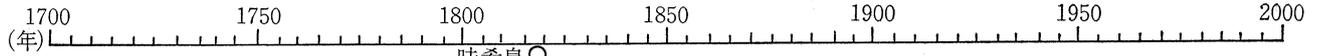
豪斯多拉利洲 〈オオスタラリヤ〉	1876	KA二	新和蘭 〈しんおらんだ〉	1872	コ
豪洲	1876	KA二	澳大利 〈おうすたり〉	1872	コ
「オオスタラリヤ」 洲	1876	KA二	澳大利亜 〈あうすとりや〉	1872	tyu
豪斯多辣利 〈オオスタラリヤ〉	1876	KA二	澳大利亜 〈アウスタリヤ〉	1872	tyu
豪斯多辣利洲 〈オオスタラリヤ〉	1876	KA二	澳大利洲 〈あうす?りやし う〉	1872	tyu
豪斯多刺利亜 〈オオスタラリヤ〉	1876	KA三	嶋嶼洲 〈たうよしう〉	1873	オ
豪斯多刺利州 〈オオスタラリヤ〉	1876	KA三	(其原名は) 何遮 備加〈をせあにか〉	1873	オ
澳大利亞	1878	8	浩斯特里 〈をゝすたりー〉	1873	オ
澳大利亞島 (俗稱新金山)	1878	二十九	塊太利 〈おゝすたりあ〉	1873	キ
澳大利亜 〈ラムスタリア〉	1878	gu	澳大利亞	1874	ナ
澳(人)	1878	gu	澳大利亞	1874	テ
澳大利 〈おうすたり〉	1879	エ	澳大利亞	1874	テ
澳大利洲 〈おうすとりやし う〉	1879	エ	澳大利亞	1874	テ
濠洲	1881・9	F	澳大利亞 〈アウスタラリア〉	1874	テ
澳地利亜	1882	myo	阿西尼亞 〈アウスタリヤ〉	1874	hyo
濠斯太朗利亞洲	1883	Ta	澳釈?亞尼亞洲 〈アウスタリヤシ ウ〉	1874	hyo
塊太利亞	1884	syu	(北) 澳大利亞 〈アウスタラリア〉	1874	hyo
(西) 澳地利亞	1884	syu	(南) 澳大利亞 〈ソウスラウスト ラリヤ〉	1874	hyo
澳大利亞 〈オーストラリア〉	1884	syu	塊太利亜(大洋洲) 〈オースタリア〉	1874	NI
澳大利亞 〈オーストラリヤ〉 (又新和蘭トモ云 フ)	1884	syu	澳太利	1875	ヅ
(南西両) 塊	1884	syu	濠洲	1875・6	F
(南) 澳	1884	syu	澳大利洲	1875・6	F
南澳大利亞 〈サウスオースタ ラリヤ〉	1884	syu	澳大利亜 〈オースタラリヤ〉	1876	ヌ
澳洲	1884	syu	澳大利亜	1876	ヌ
濠洲	1886	む	豪〈オース〉	1876	KA一
濠洲	1886・9	E			
大濠洲	1886・9	E			

奧斯達拉西亞	1900	三十一
奧士達拉西亞	1900	三十一
奧士大利亞	1900	三十一
奧大利洲	1900	三十一
奧洲	1900	三十一
濠太刺利亞 〈オーストラリア〉	1900	Sa
濠太刺利亞洲	1900	Sa
濠洲	1900	Sa
濠太刺利亞	1901	Si
濠洲聯邦	1901・1	C
濠洲聯邦	1901・1	C
濠洲	1901・1	C
オーストラリヤ	1903	Su
濠洲	1903	八十
(南)濠	1903・6	八十一
澳洲	1904	三十三
濠洲聯邦立	1906	GO
濠洲	1906	GO
おーすたらりあ	1906	GO
オーストララシヤ	1906	GO
濠洲〈がうしう〉	1906	GO
澳太刺利亞	1906	GO
濠太刺利亞	1906	GO
澳太刺利亞	1906	GO
濠太刺利亞	1906	GO
(南)オーストラ リア	1906	GO
おーすとらりあ	1906	GO
濠太刺利	1906	GO
(南)おーすとら りや	1906	GO
濠洲 〈あうすたらりや (カウシウ)〉	1908	myu
濠洲聯邦	1908・12	K
オーストラリヤ	1910	Se
濠太刺利	1914	122
濠太刺利	1914	123
オーストラリヤ	1917	DO

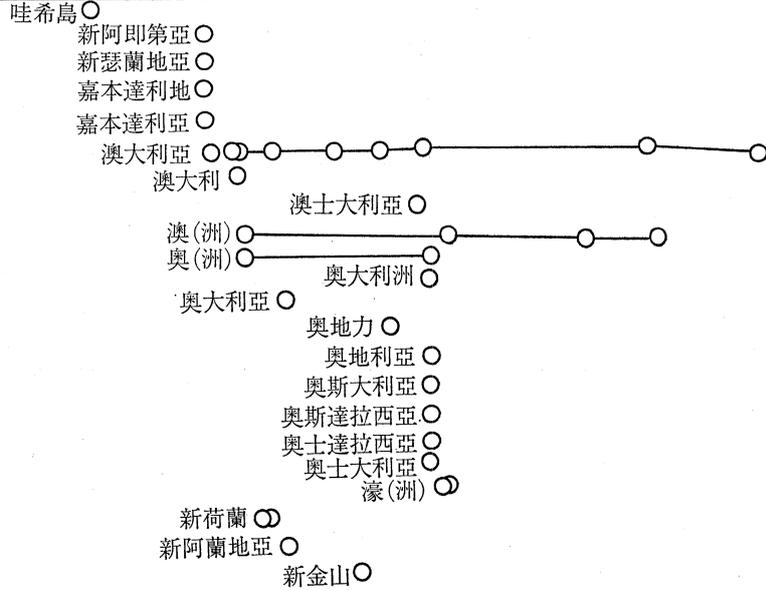
濠斯多利	1887	7
新和蘭陀 (New Holland)	1887	ホ
澳太利亞 (Australia)	1887	ホ
濠斯刺利 〈アウスタラリア〉	1888	う
濠洲	1889・2	I
奧地力	1890	三十
澳太利 〈アフスタリヤ〉	1890	ryu
澳太利亞	1890	四十八
濠太利亞洲 〈アウスタラリア〉	1893	Ti
濠洲	1893・12	G
濠洲	1894・1	C
濠太利	1894	DE
濠洲	1894	DE
濠太利亞洲	1894	DE
澳太拉利亞	1894	DE
濠太刺利亞 〈アウスタラリア〉	1894	Tu
濠太刺利亞 〈アウスタラリア〉	1894	Tu
濠太刺利亞	1894	Tu
濠洲	1894	Tu
あうすとらりしや	1894	Tu
濠洲(人)	1895・4	D
濠洲	1895・11	D
澳太利 〈アフスタリヤ〉	1896	ryo
濠洲(人)	1896	J
濠洲	1896・11	J
澳太利亞洲 〈おーすとらりや〉	1896	GE
澳太利亞洲	1897	GE
澳士大利亞	1898	十九
濠洲	1899・2	J
奧地利亞洲	1900	二十四
澳太利亞洲	1900	二十四
奧斯大利亞	1900	三十一

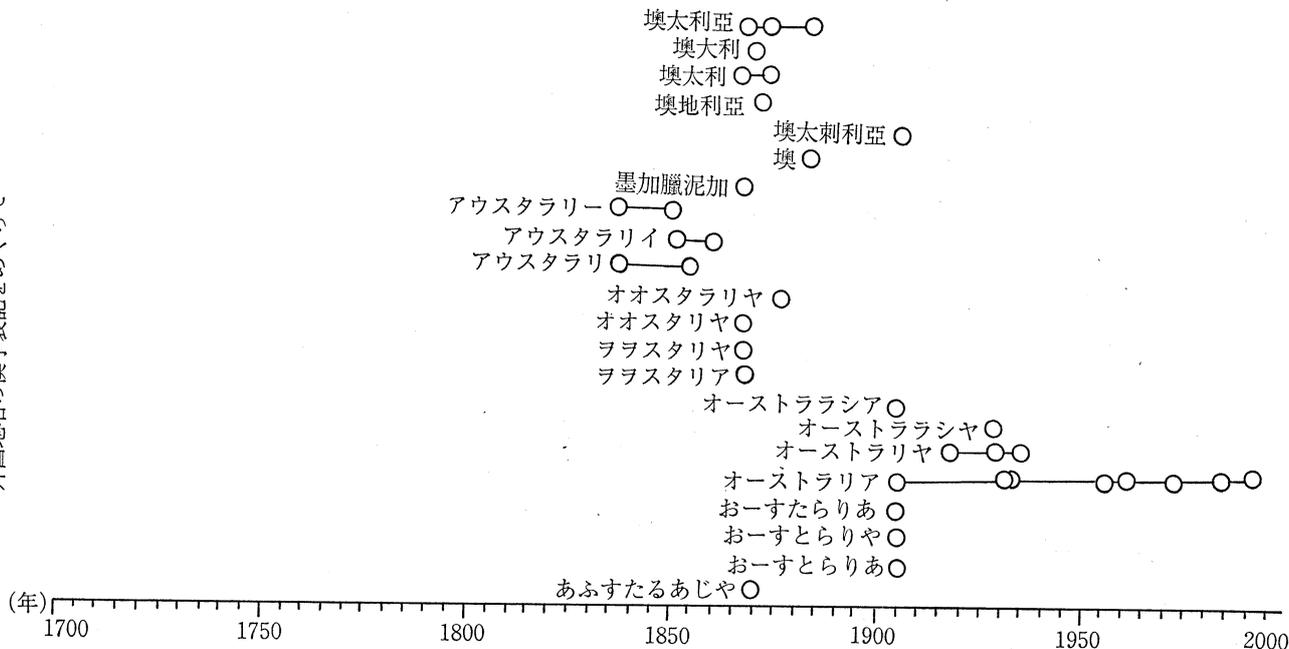
オーストラリア連邦	1972	hya	濠洲<がう>	1918	So.
オーストラリア (Australia)	1983	二十五	濠	1918	So
オーストラリア	1984	zyo	濠太刺利	1919	3
オーストラリア連邦	1984	zyo	濠太利	1919	4
豪	1992・5	朝日	おおすとらりやしう (濠斯太刺利亞洲・濠洲)	1921	nyo
豪州	1992・5	朝日	濠太刺利聯邦	1922	6
オーストラリア	1992・5	朝日	オーストララシア	1928	ハ
新和蘭	文化・文政頃	62	濠太刺利亞大陸	1928	ハ
新阿蘭陀	江戸後期	55	濠太刺利大陸	1928	ハ
新阿蘭陀	江戸末期	81	濠太刺利	1928	ハ
新ヲランダ	江戸末期	86	濠太刺利亞	1928	ハ
豪斯多刺利亞 <エスタラリア>	江戸末期	86	濠洲	1928	ハ
南方大洲メカラニカ	江戸末期	86	オーストラリヤ・濠洲	1928	nyu
南方大洲豪斯多刺利亞	江戸末期	88	オーストラリア	1932	hyu
新阿蘭陀	江戸末期	88	濠太刺利	1932	hyu
新ヲランダ	江戸末期	89	濠洲	1932	hyu
南方大州墨瓦臘泥伽	江戸末期	89	(…) 新オランダ (と呼ばれた)	1932	hyu
墨瓦臘尼加	江戸末期	89(文)	オーストラリア	1934	syo
新阿蘭陀	江戸末期	90	濠太刺利	1934	syo
新和蘭陀	江戸末期	91	濠洲	1934	syo
豪斯多刺利亞洲 <アウスタラリヤ>	江戸末期	91	濠洲大陸	1934	syo
新和蘭陀 <イハホルランド>	江戸末期	91	オーストラリヤ (濠洲ともいふ) (<がうしゅう>)	1934	nya
新阿蘭陀	江戸末期	91	澳洲	1937	六十八
豪斯多刺利亞洲	江戸末期	93	澳大利亞	1955	九
			澳洲	1955	九
			澳大利亞聯邦	1955	九
			オーストラリア	1955	zya
			オーストラリア連邦	1955	zya
			オーストラリア	1961	zyu
			濠太刺利 <オーストラリア>	1969	KI
			豪州・濠州・濠洲 <ごうしゅう>	1969	KI
			オーストラリア	1972	hya

オーストラリア



中国





付録：調査に用いた資料：

* 拙稿「外国地名の漢字表記について——「アフリカ」を中心に——」（『語文』58輯・1992年4月）でも調査に用いた資料を付録に列挙しておいた。今回は紙数を押さえるため、前稿の付録に記載した資料は割愛したので、前稿の付録も併せて参照されたい。

記号	書名	作者	年代	典拠・所蔵
56	万国地球全図	桂川甫周	1792頃	「日本古地図大成」
七	坤輿全図	南懷仁	1802	神戸市立美術館 (1860年版)
六十七	海録	謝清高口述 ・楊炳南筆受	1820以後	台湾商務印書館
117	天保七年版都会節用百 家通世界萬國之図		1836	米谷隆史氏
RI	窮理通	帆足萬里	1836(序)	「日本科学古典全書」一
120	世界図血		1840頃	「日本古地図大成」
15	銅版万国輿地方図	永井則	1846	「日本の古地図」
79	大輿地球儀	沼尻墨	1855	「日本古地図大成」
六	皇朝中外一統輿図		1863	神戸市立美術館
Ta	地理小学	若林虎三郎	1883	教科書大系
む	将来之日本	徳富蘇峰	1886	明治文学全集
う	増訂もしや草紙	福地桜痴	1888	明治文学全集
Ti	日本地理初歩(上・下)		1893	学海指針社・教科書大系
Tu	萬國地理初歩(卷之上 ・下)		1894	学海指針社・教科書大系
DE	傳家宝典明治節用大全	博文館編局 編纂	1894	東京 博文館蔵板・阪大
GE	唐人往来	福沢諭吉	1897	明治文学全集
十九	天演説	巖復	1898	商務印書館
Sa	小学地理(一～四)		1900	普及社・教科書大系
Si	修正新訂地誌(卷一・二)		1901	文学社・教科書大系
Su	小学地理(一・二) (第一期国定地理教科書)		1903	教科書大系
八十	湖北学生界		1903	中華民國史料叢編
八十一	漢声		1903	中華民國史料叢編
GO	日用百科宝典	小林鶯里	1906	東京 尚栄堂・前田富 祺氏
Se	尋常小学地理(卷一・二) (第二期国定地理教科書)		1910	教科書大系

DO	大正学生百科寶鑑	巖谷小波	1917	大阪 田中宋栄堂・前田富祺氏
So	尋常小学地理書(卷一・二)(第三期国定地理教科書)		1918	教科書大系
PU	便利調法懐中百科全書	新山虎治	1920	東京 誠進堂蔵版・前田富祺氏
55	世界四大州図・四十八国人物図		江戸後期	「日本古地図大成」
T	萬國新聞紙		幕末明治	「幕末明治新聞全集」・世界文庫
J	報知		明治	「新聞集成明治編年史」
K	東朝		明治	「新聞集成明治編年史」
朝日	朝日新聞			

* 記号の説明：漢数字は中国側の資料、他は日本側の資料である。アラビア数字は地図の資料である。